烏帽子会会報

2006年春号　Vol. 40

■第２５回烏帽子会総会案内　3　裏表紙
■医学部長・病院長就任挨拶　5

福岡大学医学部同窓会

目　　次

・第25回烏帽子会総会のご案内 …… 3
・会長挨拶
　快　挙　！ …… 高木忠博 4
・医学部長就任挨拶
　第8代医学部長就任の挨拶 …… 岩崎　宏 5
・病院長就任挨拶
　第9代福岡大学病院長に就任して …… 瓦林達比古 6
・教授就任挨拶
　教授就任のご挨拶 …… 喜久田利弘 7
　福岡大学筑紫病院消化器科教授に昇任して …… 松井敏幸 8
　ご　挨　拶 …… 渡辺憲太朗 9
　教授就任ご挨拶 …… 廣瀬伸一 10
・教授就任祝辞
　廣瀬伸一先生教授就任おめでとうございます …… 松永　彰 11
　廣瀬伸一君の小児科学教授就任を祝って …… 宇都宮英綱 12
・教授退任挨拶
　退任のご挨拶 …… 宮内亮輔 13
　退職にあたって …… 池原征夫 14
　原点に還る …… 満留昭久 16
　退任にあたって …… 有馬純孝 17
　筑紫病院から小児科の灯は消えなかった …… 津留　徳 17
・会員寄稿
　『75会』福岡大学医学部入学30周年を記念して …… 木村　博 18
・同窓生交歓 No.5
　5回生の会、開催しました …… 松田年浩 20
・報告 …… 22
　恒例の国家試験激励会開催---- 来年こそは!! …… 田中伸之介 23
・部長奮闘記
　部長奮闘記 …… 友尻茂樹 24
・教室紹介
　泌尿器科学教室　医局紹介 …… 田丸俊三 28
　眼科学教室紹介 …… 尾崎弘明 29
・支部だより
　筑紫病院支部だより …… 石井　龍 29
　平成17年度まかせん会例会（同窓会福岡支部） …… 田野茂樹 30
・特集　クラブ生まれて30年
　軟式野球部生まれて30年 …… 椎　教次 31
・キャンパス便り
　医学祭を振り返って …… 中島勇太 33
・訃報と追悼文
　追悼　故白川光一先生 …… 鬼木寛二 34
　御鍵孝史　追悼 …… 石田秀樹 35
・医局長・医長名簿 …… 36
・教育職員人事 …… 37
・編集後記 …… 37

第25回烏帽子会総会のご案内

—今だから　愛—

平成１８年度の烏帽子会総会は、我々９回生と１９回生が当番幹事として開催させていただくことになりました。昨今、新聞・テレビなどのメディアからは、テロ・戦争・紛争・暴動・殺人・虐待・誘拐・汚職・偽装・詐欺などなど、陰鬱な報道ばかりが目に付きます。何か大切なことを我々は忘れていないでしょうか？そこで今年のテーマは、「今だから愛」と決めさせていただきました。隣人愛・人類愛・家族愛・兄弟愛・師弟愛…、どんな形であれ愛が溢れていれば、一日一日を幸せな気持ちでいられるのではないでしょうか。特別講演として、９回生の吉永陽一郎先生に講師を引き受けていただきました。吉永先生は、久留米で小児科を御開業の傍ら育児支援活動を積極的に行っておられ、最近は本も出版されております（詳細は烏帽子会会報2005年秋号をご覧下さい）。「そばにいる人はだれ？：ランナーの伴走者としての医療者」と題して、先生の優しい人柄が滲み出たお話が聴けるものと同級生として期待しております。またアトラクションのひとつとして、こちらも９回生の渕野由起先生らによる胡弓演奏、さらに２次会では伝説の９回生バンド"*Misty*"が復活するとの噂もあります。実行委員一同、多くの同窓生が幸せな気持ちになれるよう、腕によりをかけて愛に溢れた企画を練っております。殺伐とした日々、久しぶりに懐かしい仲間に会いに出かけませんか？数多くのご参加、心よりお待ちしております。

Everything is love!

第25回烏帽子会総会　開催要領

日　時：　平成18年7月8日（土）
場　所：　ホテル日航福岡
時　間：　1. 同窓会総会　　17:00 － 18:00
　　2. 特別講演会　　18:00 － 19:00
　　「そばにいる人はだれ？：ランナーの伴走者としての医療者」
　　吉永小児科医院　院長　　吉永陽一郎　先生（９回生）
　　3. 懇親会　　19:00 － 21:00
会　費：　１万円　　当番幹事：９・19回生

総会に関するお問い合わせは下記までお願いいたします。

問い合わせ：　総会委員長　福岡大学整形外科　副島　修（９回生）
TEL: 092-801-1011（内線3465）, FAX: 092-864-9055
E-mail: osoejima@cis.fukuoka-u.ac.jp

出席のご返事を前ページに綴じ込みの葉書で
６月２０日までにお願いします。

会長挨拶

快　挙　！

烏帽子会　会長　高　木　忠　博（1回生･脳神経外科クリニック高木院長）

今年の同窓会最大のニュースは、小児科教授に廣瀬伸一君が就任した事です。卒業生の教授就任への機会は２０－３０年に一回しか有りません。廣瀬君は母校小児科の将来を背負って頑張ってくれると信じます。

今回の教授選考では一回で過半数の賛同を得て選出されたと聞きます。研究業績も全く文句無しだった様です。我々卒業生が教育職に就く時には論文数が創立以来問題視されて来ました。廣瀬君の論文数、内容は、十分評価に耐える業績を持っていたのだと思います。今はネット上で全国大学人の業績論文を全部知る事が出来る様になりました。今迄教授選考に論文業績は必須の条件と我々は常に言われ続けて来ましたので、ネット上公表されている他大学教授と母校教授との論文の差に驚きました。この結果を考えると現在の卒業生教授人は、教授への登竜門としての論文条件を全員クリアーして、堂々と就任していますから見事と言うしかありません。ネット上公表されたもの、中にはオヤと思う様なものもありますが、これから我々の卒業生は論文数に関しては全く卑屈になる事無く、今迄どおり堂々とコツコツと堅実な論文を出しながら、大学人として教育職への参加を続けて貰いたいと思います。

少子高齢化社会の中での小児科が担う重要性は今後益々増大すると思います。今回の医療費改正でも小児医療への補償期待は大きいものでした。福大が西日本の小児医療の中心になる位の気持ちで、広瀬君に頑張って欲しいと皆が期待していると思います。

又、教育の基本は情熱＝愛情だと思います。OBである広瀬君が大学人になってから話していた熱い学生教育への情熱に、全幅の信頼を置いている仲間は多いと思います。登竜門は中国の故事でこの門を越えた鯉は龍になる事から使われる言葉です。廣瀬君はその登竜門を超えた人間ですから、先に登竜門を越えた仲間と協力して自分の力を存分に発揮し、母校及び後輩学生の才能を伸ばしてくれる人物と固く信じています。

大学、母校を支える人材が着実に育っている母校福大は、必ず独創的大学医学部として発展して行くと思います。今我々同窓生にはどの様な困難が有ろうと、挑戦者精神が絶対に途絶えない継続する力量を問われていると思います。これからも我々烏帽子会は母校を一番大切に考え、最も愛情を注ぐ事の出来る集団として成長して行く様に頑張って行きましょう。　これは快挙です！

医学部長就任挨拶

第8代医学部長就任の挨拶

医学部長　岩崎　宏（特別会員・病理学）

私は昨年12月に満留前医学部長の跡を継ぎ、医学部長に就任いたしました．我々の医学部は昭和47年に創立されましたが、すでに34年の歴史を刻み、新設医大・医学部と称された時代は過去のものとなりつつあります。人間で言えば青壮年期の活力にあふれ、もっとも充実した年代に差しかかっています。そして本年は福岡大学医学部の卒業生が3000人の大台を突破するという、記念すべき年となりました。多くの卒業生は全国各地で優秀な医師として活躍しており、あるいは大学の教授や助教授として優れた研究成果をあげておられる学究も少なくありません。これらは医学部同窓会構成員が誇って良い事実です。

現在、日本の医療と医学教育は大きな転換期にありますが、福岡大学医学部も大きな変革期にあります。医学部教授陣は新旧の交代期にあたり、多数の新進気鋭の教授が就任され、教授会メンバーは大幅に若返り、教育、診療、研究の体制が一新されようとしています。そして医学部における研究の高度化を促進するために、講座制の再編と改善が計画されています。その一環として、現在の外科学第一、外科学第二および心臓血管外科学を一つの大講座としてまとめ、その中で臓器別に再編し、消化器、呼吸器、心臓血管を3つの柱とするとともに、乳腺や内分泌など他の臓器にも対応できるように再編成するという方針が医学部正教授会で決定され、平成19年4月には新しい外科学教室が生まれる予定です。特に消化器分野は範囲が広く、疾患の種類が多く、患者さんも多いため、最も重要な部門になると思われます。

また長年の念願であった福岡大学病院の新診療棟の着工が確定し、これが完成すれば『高度な先進医療を提供する包括的医療センター』として、診療体制の飛躍的なレベルアップが期待されます。そして来年度は医学部看護学科の開設も予定されており、文部科学省への申請準備が進んでいます。看護学科から優秀な看護師が巣立つ日も遠くありません。

しかしながら、問題点も多く残されています。医学部では過去数年間いろいろな教育改革に取り組みましたが、学生諸君の学力は全く向上せず、CBT全国共用試験および医師国家試験の成績も、全国最低レベルという危機的状態に陥っています。現在の厳しい状況を打開するために、教授会は種々の対策を考えていますが、全教職員が一体となって福岡大学の実情に即した教育体制を早急に組立て直し、学生諸君に希望をもたせ、やる気を起こさせる必要があります。

さらに医学部に活力を与えるためには、研究体制を充実することが重要です。研究者のニーズに対応し、優れた研究成果をあげられるように総合研究室（総研）の機能を整備し、効率的に運用したいと思います。アニマルセンター、分子腫瘍学センター、RIセンターなども、時代の要求に応えられるように、有機的に連携して運用する必要があります。これらの目標を達成し、医学部・病院をさらに発展させるためにはどのようにすればよいか、皆様と考えていきたいと存じます。同窓会会員の皆様の一層のご支援とご鞭撻をお願い申し上げます。

病院長就任挨拶

第9代福岡大学病院長に就任して

福岡大学病院長　瓦　林　達比古（特別会員・産科婦人科学）

新年度を迎え、烏帽子会の先生方におかれましては益々お元気にご活躍のことと拝察いたします。また本年も新しい会員を迎えられ、福岡大学医学部同窓会のさらなる発展の年になるのではないかと感じております。今年は医学部第29回生が卒業し、会員数も一つの節目である3,000名を超えたようです。世の中、大小さまざま種々雑多な同窓会が存在しますが、多感な青春時代の6年間を同じキャンパスで過ごした仲間、それも全員医師という高度な専門家集団の3,000名ですので、とてつもない社会的パワーを秘めた組織であると考えております。さらに医師としてのキャリアも福岡大学病院を中心に獲得されてきた先生方が多いと思いますので、卒前・卒後を合わせると10年を超える年月を福岡大学という組織の中で生活された、つまりその文化を享受された方々の集まりと考えることができると思います。今後福岡大学出身者が地域社会の中でさらに飛躍するためには、井の中の蛙にならず、積極的にその中に飛び込み、またそれを取り込んで大きな力にしていただきたいと切に希望いたします。

さて、私は今回上記のようなテーマで執筆依頼をいただきましたが、これを機に歴代病院長を振り返りましたので以下にご紹介いたします。初代は樋口謙太郎先生（皮膚科：昭和48～50年）、第2代曽田豊二先生（耳鼻咽喉科：昭和50～54年）、第3代朝長正道先生（脳神経外科：昭和54～60年）、第4代志村秀彦先生（外科第1：昭和60年～平成1年）、第5代菊池昌弘先生（病理部：平成1～9年10月）、第6代大島健司先生（眼科：平成9年10～11月）、第7代有吉朝美先生（泌尿器科：平成9～13年）、第8代白日高歩先生（外科第2：平成13～17年）で、私は第9代になる訳です。この間、福岡大学病院は医育機関として、また地域の中核病院として高度な先進医療と医学教育を提供してきました。診療、教育、研究すべての面において切れ目なく高い質を維持されてきた先輩方のご努力に、ここで改めて感謝と敬意の念を表したいと思います。3,000名にまで膨れ上がった同窓会組織も、まさにこれらのご努力の上に成り立っているものです。人間一人の力はたかが知れていますが、連携の取れた集団の結束力はその数に倍するパワーを生み出します。モラルハザードがあらゆる世代にまで拡大している現在、人間の原点に立ち返って今一度自分の身の回りから見直し、家族を、属する組織を、そして地域社会を大切にして、コミュニケーションの輪を広げることが必要ではないかと感じております。その中で世代を繋ぐエデュケーションを実践することが私達の使命であると考える今日この頃です。みんな仲良く共存共栄。同窓会諸氏の絶大なるご支援をお願い申し上げます。

教授就任挨拶

教授就任のご挨拶

歯科口腔外科学　教授　喜久田　利　弘　（特別会員）

S52. 3　九州歯科大学歯学部卒業
S56. 3　〃大学院歯学研究科修了
S56. 4　〃　口腔外科学第１講座特別研究生入局
S57. 4　〃　〃　講座　助手
S59. 4　バーゼル大学医学部口腔外科（文部省長期在外研究員）
S60. 4　九州歯科大学口腔外科学第１講座併任講師
S62.11　ジョンピータースミス病院口腔外科（福岡県在外研究員）
H 6. 5　九州歯科大学口腔外科学第１講座　講師
H 6.12　福岡大学医学部歯科口腔外科学助教授
H14. 9　テキサス州立大学ダラス校口腔外科（福岡大学在外研究員）
H17.10　福岡大学 医学部 歯科口腔外科学教授

私は平成17年10月1日付けで都温彦教授の後任として歯科口腔外科学講座の教授に昇格いたしました。出身は北九州市の小倉です。昭和52年に九州歯科大学歯学部を卒業、同大学院歯学研究科にて、不正咬合と顎関節の関連性を病理組織学的に実験研究し、学位を取得しました。昭和57年に同大学口腔外科学第１講座の助手となり、臨床的にも不正咬合と顎口腔機能の研究を進めました。昭和59年４月からバーゼル大学医学部口腔外科で、口腔顎顔面外科をリードしていたスピーセル教授やプライン助教授の下でAOプレートによる顎骨骨片接合術の指導を直々に受け、総合的な口腔外科手術学を学びました。帰国後、直ちに咬合改善手術や顎骨骨折手術の骨片固定にネジやプレートによる固定術を開始し、術後の早期固形食の摂食と入院期間の大幅な短縮を獲得することができました。昭和62年にジョンピータースミス病院口腔外科で下顎枝矢状分割術変法の発案者のエプカー先生の下で顎変形症に対する歯科外科的な咬合改善術の研修を行いました。以後、臨床的に咬合改善や咬合温存下歯科外科手術を主に行ってきました。

平成６年12月に当福岡大学医学部歯科口腔外科学講座に助教授として赴任して以降、都温彦教授の御指導の下で11年間、研究の継続と歯科治療における心身医学的アプローチの基本を研鑽しました。同窓の先生方には平成７年のM4の歯科口腔外科学（現、M3）の講義を22回生から、また、副担任は25回生の１年次から受け持たせていただきました。講義はなるべく理解しやすい内容と多くの症例を提示し、学生諸君に口腔疾患に興味を持っていただけるよう努力したつもりです。また、BSLは21回生から毎週３日間、医師に必要な歯科学的知識と両者のリンクの必要性を、内科疾患と口腔病変や口腔常在菌と他臓器への感染などを主に学んでいただいたと思います。また、総合試験問題やBSL試験の作成を担当してきましたので、口腔粘膜疾患や口腔機能に関連する問題が出ていたことと思います。当時、学生であった同窓の先生方が各地で活躍しているのを見聞きすると大変嬉しく思います。

平成14年９月からテキサス州立大学ダラス校医学部で顎骨外傷治療を主に口腔外科臨床の研修を受けました。これらの成果は、福岡大学病院内はもとより福岡地区での２次医療、有病者の歯科治療や救急患者の歯科的援助治療に反映できているものと思っております。

今後も同窓生の先生方の御支援と御助言をいただき、医学生に必要な口腔疾患の教育、口腔科学的研究、無痛下歯科治療や歯科外科治療に満身努力したいと思っております。

福岡大学筑紫病院消化器科教授に昇任して

福岡大学筑紫病院　消化器科教授　松　井　敏　幸（特別会員）

S50. 3　九州大学医学部卒業
S50. 6　〃　二内科入局
S52. 4　〃　医員
S57. 4　松山赤十字病院消化器科副部長
S58. 4　佐田病院胃腸科部長
S59. 5　九州大学第二内科助手
S60. 8　北京・中日友好医院
S61. 8　九州大学第二内科助手復職
H 2. 4　福岡大学筑紫病院助教授（消化器科）
H10. 7　英国ｵｯｸｽﾌｫｰﾄﾞ大学留学
H10.11　復職
H17. 4　福岡大学筑紫病院消化器科部長
H17.10　福岡大学筑紫病院教授（消化器科）

私は2005年10月より福岡大学筑紫病院消化器科教授に昇進しました。昭和50年九州大学を卒業後九州大学第2内科（尾前照雄教授）に入局し、消化器研究室（八尾恒良先生）に所属しました。その当時、飯田三雄先生（現九州大学第2内科教授）が直接の指導者でした。平成2年から当科に助教授として赴任していました。われわれの病院は、消化器疾患を全般的に診る急性期病院であると同時に、難治性疾患を診る役割をも有しています。急性期疾患では、消化管疾患、肝疾患、胆道・膵疾患と広くカバーできます。消化管出血、腸閉塞、黄疸、急性腹症、など絶え間なく消化器急性症患者に利用してもらっています。当院は救急病院を標榜しており、救急部も活躍していることから、その対応は確りとしています。また、当院は、難治性腸疾患の患者さんが多く来院しています。特に潰瘍性大腸炎患者数とCrohn病患者数は全国的に見ても多いようです。通院・入院別に見ると、年間400－500人が通院し、常に20人の難治性腸疾患患者さんが入院しています。これは、小生の前任者である八尾恒良先生がこの方面のパイオニアであったことによります。福岡県のみならず九州全県からも多数の方が紹介されています。

教室は、開設20年と歴史は浅い科です。これまで、多くの医師が在籍し、その数は100人近くになります。小生も15年前から当院に赴任しています。現在の教室員数は45人で、15人が院外の関連病院（福岡市医師会病院、佐田病院、松山日赤、新小倉、芦屋中央、佐世保中央、など）に出張中です。部長級の責任者も4人となりました。新研修医制度になり、大学病院は研修医が減り、弱体化するところが多いようです。われわれの病院は、逆に研修医指導体制を整えたこと、指導者が多いこと、一般病院に近い患者疾病内容から、研修医希望者は多いようです。

消化管疾患では、外科と病理との組み合わせが必要です。その点でわが病院は強力な協調体制ができています。すなわち、外科は二見喜太郎助教授、病理は岩下明徳教授が全国的な仕事で有名であり、実績もあります。3者の協調は抜群に良く、この点でわれわれの科は随分助かっています。

難治性腸疾患のうち、潰瘍性大腸炎は患者数が全国で8万人を超えました。そのため外来患者数が増えていますし、難治化した方の紹介が多くなっています。われわれの科では、多くの先進的治療を導入し、それなりの治療成績を収めてきました。難治化する要因の研究も行い、サイトメガロウィルス感染が引き金となることを突き止め、治療方針の確立に役立ちました。手術適応を適切に判断するため、手術例も増えています。また、免疫抑制剤の治験も数多く行っています。

胃や大腸の早期癌に対する内視鏡治療は、粘膜切除術（EMR）が進化して内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）として確立しました。われわれの科は、この手技においても優れた成績を挙げつつあります。多くの患者さんを紹介され、うれしい悲鳴をあげる場合があります。過去、EMRの時代には、長径2cmの胃がんは安全に取ることが難しかったのですが、現時点では胃癌の最大径に関して

は大きさの制限はなくなりました。安全に大きな早期がんを切除することが可能となり、外科的に粘膜癌を手術することはなくなりました。大腸の病変はその域に達していませんが、大きな病変を確実に取る技術は間も無く完成するものと思われます。 消化器疾患はありふれたものですが、その診療の進歩は早いものです。本稿で述べませんでしたが内視鏡技術も著しく進歩しています。北部九州の拠点病院を目指してわれわれの科は絶え間なく進歩することと思われます。

ご 挨 拶

呼吸器科教授 渡 辺 憲太朗（特別会員）

S51. 3 九州大学医学部卒業
S51. 6 九州大学医学部附属胸部疾患研究所入局
S57. 3 九州大学大学院医学研究科修了
S58. 4 九州大学医学部助手
S59. 6 国立病院福岡東病院呼吸器科
S61. 4 米国コーネル大学医学部研究員
S63. 7 福岡大学病院 講師（第二内科）
H11. 8 福岡大学在外研究員（Mayo Clinic Scottsdale）
H15. 4 福岡大学医学部 助教授（第四内科）
H15. 4 福岡大学病院診療部長（呼吸器科）
H17.10 福岡大学病院教授（呼吸器科）

平成17年10月に福岡大学病院呼吸器科の教授を拝命いたしました。この紙面をお借りしてご挨拶申し上げます。私は1976年に九州大学医学部を卒業後九州大学胸部疾患研究施設に入局し呼吸器科医としての仕事が始まりました。2年間の研修生活を終え大学院で病理を5年間学んだ後、再び臨床に戻りました。福岡東病院（現福岡東医療センター）への出張を経て1986年から2年間米国コーネル大学に留学しました。アメリカで帰国後の自分の身の振り方を思案していた矢先、先代教授の吉田稔先生から福岡大学に来ないかというお誘いの電話をいただき、九州大学に戻らず福岡大学呼吸器科に入局させていただくことを決め現在に至っています。

1999年sabbaticalを利用し3ヶ月間という短い間でしたがアメリカのMayo Clinic in Scottsdaleの病理に留学させていただきました。Dr. Colbyのもとで彼の膨大な呼吸器病理標本コレクションを顕微鏡で観察し、アメリカ全土から毎日届くコンサルテーションの肺生検標本をDr. Colbyとディスカッションしながら診断するトレーニングを積むことができたことは何にも代え難い貴重な体験となりました。

吉田先生が立ち上げ、育ててきた福岡大学呼吸器科を部長として私が引き継ぐことになって3年になろうとしています。吉田先生は呼吸生理の専門家であり、福岡大学に赴任するまでは呼吸機能などほとんど理解していなかった私に呼吸機能の評価が臨床上きわめて重要であることを教えてくれました。もちろん数学的に難解な部分は私には理解できませんが、基本的な知識が必須であることをやっとこのごろすこしわかるようになりました。これからは形態という一面からだけでなく、形態と機能の両面から呼吸器疾患を理解するように心がけ、呼吸器専門医をめざす若い医師や学生諸君を微力ながら指導していきたいと念じています。

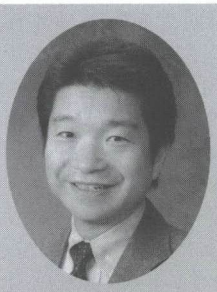
臓器としての肺は非常に幅広い役割を担っています。全身を巡る血液を一手に引き受けガス交換する仕事を担いつつ、外界と直接接する肺は外からの侵入者と直接戦う臓器でもあります。肺はその置かれた環境ゆえに非常に多岐にわたる疾患に遭遇します。私が大学を卒業した頃呼吸器科といえば結核を連想し、他の内科部門と比べて地味な診療科でした。しかし最近は呼吸器科の重要性が認知されるようになり、呼吸器専門医の需

要がとみに増しています。

病理組織標本から私の呼吸器病学に対する興味の輪が拡がっていきました。呼吸器科とはどのようか診療科なのか、まずはほんのちょっとでもよいですから覗いてみてください。胸部X線写真1枚から、あるいはスパイロメトリーから呼吸器に対する興味の輪が拡がるかもしれません。そのときは全力でお手伝いします。

教授就任ご挨拶

小児科学 教授　廣　瀬　伸　一（3回生）



S55. 3　福岡大学医学部卒業
S55. 6　福岡大学病院（小児科）
S63. 9　Case western reserve University(Research Associate)
H 4. 4　福岡大学病院助手（小児科）
H 4.10　福岡大学病院併任講師（小児科）
H 6. 4　福岡大学病院講師（小児科）
H 9. 4　福岡大学医学部助教授（小児科学）
H18. 4　福岡大学医学部教授（小児科学）

この度、満留昭久前教授の後を引き継ぎ、福岡大学小児科の主任教授に就任いたしました。紙面を借りて、就任のご報告と皆様のご支援にお礼を申し上げます。

教授選には日本全国からの応募があり、私を含め6名での教授選考になりました。対立候補の先生がたは業績、人柄ともに素晴らしい小児科医ばかりで、不安と緊張もありました。この間、多くの同窓会の皆様に温かい励ましのお言葉を頂戴し勇気付けられました。幸い、正教授会での最終選考で、非常に多数のご支持を頂き、教授に選出していただきました。これも一重に教授会のメンバーとして応援していただいた先生方はもとより、多くの同窓会の皆様のお陰と感謝しております。

福岡大学医学部を卒業して四半世紀。教授になろうと思って歩いて来た道ではありませんでした。むしろ、やりたいことだけを追いかけてきた結果が、小児科の主任教授であったという印象です。しかしながら、自らの意思で立候補し、教授に選出されたからには、皆様の期待を裏切ることなく、その職務をまっとうする所存です。また、その責任を思う時、身が引き締まる思いです。同時に、福岡大学出身者として母校の小児科の教授となり、わが子とも言うべき後輩を指導できることに大きな喜びと期待を感じています。

私が入学した当時は本学の医学部にはまだ卒業生もなく、私達の前に拓かれた道はなく、自身が先達でした。それは挑戦でもありましたが、喜びであったのかもしれません。しかしそれは当時の福岡大学医学部は、地方私立大学の名声も誇る歴史もない一新設医学部に過ぎなかったことを意味していました。時に偏見や蔑視もあった時代でしたが、出身校を変えるわけにはいかず、できることはただ研究や診療を通じ母校の名声を高めること以外にないと信じて今日に至りました。

おかげで、昨今の受験生に対する福岡大学医学部の人気は高まり、成績も優秀な学生が入学するようになり、大変誇らしく思えるようになりました。しかしながら、残念ながら、人気や偏差値の上昇に比べ国家試験の成績は満足がいく状況ではありません。今教授の私に課せられた次なる使命は後輩の指導と教育であろうと思います。今度は後進を育てることにより、母校

の名声を高められればと強く願っています。

今までは、ややもすると学生の成績不振の際には福岡大学の医学部学生の能力の限界論が教員のなかにさえも浮上してきたかに思います。それは母校に歴史がなかった昔を髣髴させ大変残念でなりませんでした。同窓の私が福岡大学の学生の能力を侮蔑することは、自らを否定することに他なりません。後輩を信頼し、尊敬し、彼らの力を伸ばしていく事こそが、母校の名声をひいては自分自身を高めるものと信じて疑いません。私と同じ思いで母校の礎を築いてこられた同窓会員の皆様に報うべく、自らを踏み石とし後進を育てて参りたいと思います。学生諸君を含め同窓会諸氏の更なるご鞭撻、ご指導をお願いいたします。

教授就任祝辞

廣瀬伸一先生教授就任おめでとうございます

内科学第二　助教授　　松　永　　彰（3回生）

廣瀬伸一くん小児科主任教授就任おめでとうございます。

特許を得ている「てんかん発症モデルラット」など最近の彼の業績は非常に素晴らしいと聞いていますが、実際には余りよく知らないので昔の思い出を中心に書きます。

廣瀬伸一くんとの付き合いは福大の1-2年の頃からなのでもう30年以上になります。その頃から非常に活動的で雄弁な男であり、何かが違う独特な雰囲気を持っていました。「とんでもないヤツだ！」と言うのが、今も昔も変わらない廣瀬伸一くんへの印象です。

学生時代、彼は私にとって遊びと中州の先生であり、お金もないし服も持っていないのに、飲屋やスナックを一緒に飲み歩いた覚えがあります。その頃から彼は妙に顔が広くお店のママさんを良く知っていたのには感心していました。また、凝り性で料理の腕前もなかなかのものであり、魚をさばいて刺身にできるほどでした。今から行こうと急に思い立って橋口雅尚くん、長野善朗くんと4人で九州一周のドライブにも行きました。勉強の方も非常にポイントをついて要領よくできている様子で、よくいっしょに谷口（廣瀬）妙子さんのノートを借りに行った記憶があります。卒業旅行は、長野くんと男3人でハワイに行き珍道中をしました。廣瀬伸一くんは、小児科に入局し、研修終了後は新生児治療などをしていたと思います。

その後研究をしたいとのことで私にも相談があり、その頃に着任されていた生化学第二の池原征夫教授、織田公光先生（現新潟大学教授）のもとへ移り、生化学の研究に没頭していました。クリーブランドに留学する途中に家族で私の留学先であるダラスによってくれたことも非常によい思い出になっています。4年間クリーブランドのケースウェスタン大学に留学していましたが、ボスに大変気に入られたようで、研究室での仕事を一手に引き受け素晴らしい論文を次々に出していました。帰国後は福大小児科に戻り、その後はお互いに忙しく過ごしていましたが、小児科医局長時代には彼の豪腕で、ほぼ循環器科に入局しそうでいた優秀な人材を何人も持って行かれました。

生化学時代からクリーブランド留学以降の彼の業績は世界レベルであり、教授になったのは実力通りであります。彼は歯に衣を着せずにずけずけ言うところがあり、教授選では少し心配しましたが、実力通り教授となることができ大変うれしく思っています。現在、研修医制度がかわり、どこの大学医局でも研究機関としての存亡の危機にあります。廣瀬伸一くんの牽引力で若い先生をたくさん集め育てて、人気のある素晴らしい福大小児科にされて下さい。また、さらに大きな目標に向かって研鑽を続けられて下さい。

廣瀬伸一君の小児科学教授就任を祝って

放射線医学　助教授　　宇都宮　英　綱（3回生）

廣瀬伸一先生。教授就任おめでとうございます。同級生として、また、同じく小児の脳を勉強してきた一学友として心からお祝い申し上げます。思い起こしてみると、君と僕は、学生時代あまり付き合いがありませんでした。お互いに硬派か軟派かといえば後者の方に属すると思うし、反りが合わないわけでもないのに不思議です。敢えて理由を挙げれば、おそらく、我々が入学した当初、教養部（1,2学年）のクラスが別々なったことでしょうか？ドイツ語などの語学の授業が分かれており、試験も違っていたので付き合いが希薄になったのかも知れません。卒業し、無事に国家試験に合格したあとも、君は小児科に私は放射線科に入局し全く異なった道を歩き出した、とその時は思っていました。それから、10年以上もの間ほとんど交流がありませんでしたが、君が米国に留学し、分子生物学の分野で優れた業績を挙げていることは、風の噂に聞いて知っていました。12年前に私が福岡大学に戻った時には、すでに君は小児科の中でも将来を嘱望される立派な小児科医になっていました。その頃の思い出ですが、ある時、君が電話で（あるいは病院の廊下の立ち話だったかも知れないが）、「今、小児科にモヤモヤ病の患者さんが入院しているので、カンファランスで血管造影所見を解説してくれないか？」と声をかけてくれたことを覚えています。今考えてみると10年ぶりに大学にもどってきた私を「こんな同級生がいるので宜しくお願いします。」と紹介してくれたのだろうと思います。また、何かの縁で同じ釜の飯を喰った仲間だから一緒に頑張ろうと言う、君の「励ましと優しさ」の現われであったのだろうと思います。恥ずかしながら私はこの時初めて「同級生はありがたい」と思うと同時に、改めて君のリーダーとしての才覚を認識しました。

その後も、君は研究に診療に着実に業績を挙げてきました。助教授に選任されたあとも、病棟の当直をしながら研究活動をされていたと聞いています。多忙な毎日の診療の中で、研究費の捻出のために常にグラントをとりにいく努力を惜しまなかったのも君の成功の大きな要因であったと思います。 数年前、君が「熱性痙攣の遺伝子を見つけたかもしれない」と言った時は本当に驚きました。科学的事実の凄さもさることながら、君が分子生物学的方法論をつかって、脳科学の世界で先駆的な仕事をしている（していた）ことにも驚かされました。この数年間に出版された君の論文には、痙攣をChannelopathy（イオンチャネル病）と言う概念で捉えることで、これまで混沌としていたてんかん学の世界に1つの道筋が出来ることが示されています。分子生物学は全く素人の私ですが、この業績はてんかん病態の理解に革新的進歩を与え、新しい治療法の開発にも大きく貢献するであろうことは直感的に理解できます。最近ではさらに研究を進め、世界で初めて遺伝子操作に基づくてんかん動物モデルの作成に成功されました。まさに世界的かつ歴史的な研究成果であり、てんかんで苦しむ子供たちに大きな希望を与えるすばらしい仕事であると確信します。このような業績は君の臨床医としての「優しさ」と研究者としての「本質を見極める強い意志」があったからこそ成されたものと思います。これからは教授として、そのスピリッツ（ど根性）を堂々と発揮し、そしてさらに磨きをかけて後輩に伝えて行かれることを期待しております。

教授退任挨拶

退任のご挨拶

総合医学研究センター　教授　宮　内　亮　輔（特別会員）

1972年4月、ご存知のように福岡大学に医学部が新設され、私は同年6月に、本学医学部助教授に就任しましたが、諸般の事情で翌年4月に着任し、解剖学第2講座（三好萬佐行主任教授）に配属しました。その後、大分医科大学（現大分大学医学部）の教授に就任するまでの5年10ヶ月間、本学で主として肉眼解剖学の講義と人体解剖実習を担当しました。

助教授時代には楽しかった事或は苦しかった事等々種々経験したはずですが、苦労した事、即ち新設医大の特殊事情のみが想い出されます。たしか1974年4月のことと記憶しますが、文部省の大学設置審議会委員の追跡監査があり、その折りいろいろ不備な事項が指摘され、改善或は充実が求められましたが、そのうちの一つに『医学教育に必要な解剖体の蒐集に格別な努力を払え』という叱責を受けました（その時点で2体の解剖体が保管されていた）。それを受けて、解剖学第1講座の和佐野武雄及び田川隆輔の両教授、第2講座の三好萬佐行教授と私の4名と事務職員とで解剖体蒐集対策を練り、山口県の一部と九州各県（鹿児島県と沖縄県を除く）の福祉事務所、老人養護施設、病床数の多い病院を対象に解剖体蒐集についての依頼行脚を行いました。その結果、1974年度には82体の解剖体を蒐集する事ができ、その後も必要数以上の解剖体を蒐集する事ができて、全国のいずれの大学よりも充実した肉眼解剖学教育を行う事ができたと、私自身は自負しております。しかし、多くの解剖体を蒐集できたのは、医学部学生のご父兄の献身的なご協力があって、はじめてできた事であると認識します。本紙をかりてご父兄には心よりお礼を申し上げます。

第1回入学生の卒業と同時に私も1978年3月本学を辞し、同年4月1日大分医科大学教授に着任しました。1978年4月1日より1991年9月30日までの13年6ヶ月間、大分医科大学に在籍しましたが、この間は福岡大学医学部非常勤講師に任命して頂きましたので、毎年数時間にわたり中1講堂で解剖学講義を行いました。

1991年9月30日私は大分医科大学教授を辞し、急逝された田川隆輔教授の後任として、同年10月1日福岡大学医学部解剖学教授に着任しました。以後、本年3月31日まで本学に在籍したことになり、私は第1回入学から第33回入学までの学生に解剖学を介して接したことになります。

先刻ご存知の如く、本学の医師国家試験合格率は決して芳しいものではありません。このことに就いては解剖学教授として、この14年6ヶ月間常に責任を感じてきました。毎年毎年、講義及び実習指導の方法を工夫して種々努力しましたが、思うように教育成果を挙げ得ず、或る年度は学生の勉学意欲を向上させるどころか、反対に学生の反発をくらうこともありました。よりよい教育のあり方或は教育方法を見出す事ができないまま退任するのが非常に残念です。と同時に己の力不足をお侘びします。

およそ、物事が大きく成り立つには、『天の時』、『地の利』、『人の和』等々、幾つかの条件が備わる必要があるといわれます。本学の医学部・病院・筑紫病院はこれらの条件を数多く備えておりますので、前途洋々たるものがあると考えます。加えるに本学の医学部・両病院の教育陣・医療陣には本学出身の優秀な人材が

数多く含まれています。これらの方々が素晴らしい知恵と強い力を結集して、医学部・病院・筑紫病院を益々繁栄させてくださる事を希っております。医学部・病院・筑紫病院の弥栄を心より祈りますと共に烏帽子会のご発展さらには烏帽子会各位のご健勝とご多幸を心より祈ります。

退職にあたって

細胞生物学　教授　池　原　征　夫（特別会員）

昭和５３年は、３月に福岡大学医学部から第１回卒業生を送り出し、４月から大学院医学研究科がスタートした。大学院発足に併せて医学部に「生化学第二」が設けられ、私はこの新設講座を担当することになった（４年前に講座再編で細胞生物学になった）。

福岡大学に赴任はしたものの、専用の研究室はまだ出来ていなかったので、４階の総合研究室の一角に仮住まいの状況が１年間続いた。この年は５月頃からほとんど雨が降らず、福岡市は大渇水になり昼間は完全断水が長期間続いたので、たとえ研究室があっても実験はほとんど出来なかったであろう。

それから早２８年が経った。医学部発足から数えれば３４年になり、卒業生も３千人を越えた。この間に福大医学部は何がどのように変わったのであろうか。カリキュラム面では、当初は医学進学課程（２年間）があり、解剖、生理、生化学などの基礎医学科目は３年生で教えていた。間もなくこれらの基礎科目は２年生で教えるようになり、それに伴い臨床科目の教育が早期に開始されるようになった。臨床科目については次第に臓器別に統合化されてゆき、数年前にほぼ完了した。それぞれの科目は短期・集中的に講義されるようになり（ブロック化）、講義の終了とともに試験が実施されるようになった。今後の課題として、基礎科目の統合化をどのように進めるかが残っている。

医学部の教育は５年生（および６年生の短期間）の臨床実習を除くと、基本的に講義中心の教育である。一人の先生が１００人の学生を相手にする講義は、担当者にとっては効率的であり、負担は相対的に軽いといえる。しかし、学生はいつまで経っても受け身の学習態度から抜け出せない。全国的な医学教育改革の流れの中にあって、学生に積極的な学習態度を身に付けさせる試みとして、福大医学部でも小人数で自己学習を中心とするやり方（Problem-based Learning (PBL) テュートリアル）を４年前に導入した。２年生のテュートリアルを担当して、教育スタッフの負担が大きいことを実感した。負担の割にはあまり教育効果は上がっていないのでは？と疑問の声もあるようだ。しかし、個々の学生に目の届く教育法として、テュートリアル教育以外にどのような方法があるだろうか。今後の課題は指導力のあるテュータの養成であろう。

同じことが５年生、６年生の臨床実習 (BSL) についても言える。BSL を単なる見学方式から、医療チームの一員に加えるやり方（クリニカルクラークシップ）に変えるためには、現在の BSL のやり方を大幅に変えて（選択性の導入や期間の延長／２週間以上）、医療チームにおける指導体制を確立しなければならない。

何かを創り上げるときには莫大なエネルギーを要する。そのような努力をつぎ込みながら、成果が遅々として目に見えないと手を抜きたくなる。手を抜きだすと未完成品の崩壊は呆気ないほど簡単である。教育ほど難しいものはない。これが退職にあたっての実感である。

原点に還る

小児科学 教授　満　留　昭　久（特別会員）

この３月末をもって福岡大学を退職いたしました。昭和５０年４月、小田禎一名誉教授、村松和彦君（福岡徳洲会病院小児科部長）、吉井薫君（前原市）の４人で九州大学小児科から赴任いたしました。以来３１年福岡大学にお世話になりました。この間多くの人からご指導とご支援をいただきました。こころからお礼申し上げます。

新設の医学部で臨床教室を創っていく仕事に参加できましたことは、私にとって貴重な経験であり、大きな喜びとなりました。

今日まで３０年間、小児科学教室で共に小児医療を研鑽した仲間は約１００名になり、それぞれ各地の小児医療の現場で活躍しております。この共に学んだ１００名の仲間は小田名誉教授はもちろん私にとっても大きな財産であると感謝しております。私どもはどのような小児科医を育成すればよいか、いつも模索しながらやってきました。初代の舩津維一郎教授、二代目の小田禎一教授を通じて、小児医療の基本的姿勢は私どもが病んでいる子ども達やその家族に何ができるかということをいつも考えて行動することを学んできました。私自身も若い小児科医にそのように指導してきました。つまり小児医療の原点は子ども達とその家族であり、迷ったらその原点に立ち戻ればよいという姿勢であります。小児科医が子ども達の「QOL」を子ども達の「命の輝き」と訳すのも同様の意味を持っているからだと思っております。

福大医学部での後半は教務委員、学部長として学生の医学教育に深く係わる機会もいただきました。学生を教育するにあたり、九大小児科の先輩である山下久留米大学名誉教授の「教育とは学生の意識を変えることであり、その行動を変えることである」ということばを大切にしてきました。私どもはカリキュラムを工夫することにより、講義や実習を工夫することにより比較的簡単に学生の意識を変えることは出来ます。しかし変わった意識を維持させ行動を変えさせることは容易ではないことを実感いたしました。ここに私どもの教育の力量の限界を痛感せざるをえませんでした。

福岡大学医学部は創立時に「人間性豊かな優れた臨床医の育成」を教育目標の一つに掲げています。これは福岡大学医学部の医学教育の原点であります。「人間性豊かな優れた臨床医」とはどのような医師像を具体的に描いているのか、いつも考えながら教員自身の臨床の姿勢を常に検証して医学と医療を学生に伝えていくことを、辛抱強く続けていく必要があります。そうすることで学生の意識が変わり、さらに行動も変わっていくものと信じています。

これからの福岡大学医学部・病院の大きな発展を祈っております。永い間ありがとうございました。

退任にあたって

筑紫病院外科　教授　有　馬　純　孝（特別会員）

福岡大学に約31年勤務したことになる。1975年6月より外科第一に、1985年7月1日より2006年3月まで筑紫病院外科に勤めた。いずれも草創期の頃で患者集めに奔走し、第1回の卒業生より歴代の卒業生を見守って来た。当初は危なっかしい人達もいたが、次第に粒が揃って来たように思う反面、特徴のある人物が少なくなって来たように思います。

“最近の若い者はなっとらん”という言葉は昔からよく言われているが、我々の年代になると2世代違うわけで何を考え、何をしようとしているのか皆目見当がつかない。とくに、子供の頃よりゲーム、テレビ、パソコン、コンピュータを相手にして育って来ており、人との対話が出来ない人が多い。医師は患者さんとの対話が最も要求される仕事であり、困ったものだとつくづく考えられるこの頃である。患者さんとの対話がないと、インフォームドコンセントの欠如、医療訴訟へと繋がるわけで、患者さんと家族からの不信感を煽る結果となる。医局で症例検討会などを通じて、会話力というか対話力の向上に努めてほしい。

学会発表の抄録、論文などを書かせてみるとその国語力の低さに唖然となる。日本語になっていない。赤鉛筆の羅列である。もう少し新聞、雑誌、小説を暇を見て読み国語力をつけてもらいたいと願っています。

最後に外科医の希望者が最近減少し続けているという。今後は、少子化などにより人口の減少が予想されており、2050年には8千万人程度になると言う。しかし、戦後の団塊の世代が定年期を迎えており、現在、年間に40万人の癌患者が発生しているが、今後10～20年間は80～90万人の癌発生が予想されている。これだけの患者を誰が手術してくれるのでしょうか。ロボットがしてくれるのでしょうか。キツイ、キタナイ、キケンの3Kで志望しないということであれば、今後の日本の医療を背負う若者として情けないことではないか。よし！自分が強固な志操を持って病める人達に対して一生を捧げてみようという人が一人でも多く出てくれることを願っています。

“来たれ外科へ”外科志望者が減少している今こそ、志望すれば重宝がられます。

私も最近6ヶ月程、腸管穿孔による腹膜炎で2回の開腹術をうけた。幸い有馬チルドレン（弟子達）の活躍により、三途の川をさ迷っているところを此岸に引き戻されました。現在リハビリ中です。

退任しても時々、若い人達と大いに酒を飲み語り合いたいと願っています。

今後の大学の益々の発展を祈っています。

筑紫病院から小児科の灯は消えなかった

筑紫病院小児科　津　留　　徳（特別会員）

1976年4月、当時の小田禎一教授、満留昭久助教授のお招きを受けて、福岡大学病院にまいりました。それまでは九州大学病院の無給の医員でしたので、この時、助手として初めて給料をもらう身分となりました。福岡大学病院小児科は、私が専門とする腎疾患が少なくなく、腎生検を必要とする患児たちが待っていました。シルバーマン針が錆びないように、

最速腎生検を開始しました。1Pの写真を頼りに昔ながらのブラインドでの生検でした。生検第一号は、現在40歳近くになっている膜性増殖性腎炎でした。今も筑紫病院に来てくれますが、寛解しており元気に過ごしております。

1985年から1年間、米国ヴァージニア医科大学小児科へ留学し、1986年7月1日筑紫病院小児科部長に就任いたしました。20年間筑紫病院で仕事をしたことになります。素晴らしい同僚、質の高いコメディカル・スタッフにも恵まれ、あっという間の20年間であったように思われます。それでも全く平穏な20年間だったわけではありませんでした。前半の10年間は、小児病棟としての38床が、小児内科だけで満床になる日もありました。スタッフを労うため、飲みに行った日があったのが、今では信じられません。

後半の10年間は、少子化の荒波を頭から被り、苦難の日々でした．私が就任した10年前と比較すると病院周辺の人口は増加しているのに、逆に小児の人口は減少していました。外来・病棟ともに患者は減少していきました。振り返って私の無策を反省しております。こんな中、時の副学長と筑紫病院長から小児科を廃止すると申し渡されました。時代の流れだと説明がありました。

大学病院は社会的使命がありますから、小児科の不採算性だけで廃止というわけにはまいりません。福岡大学がこの地に侵出することに、好意的であった小児科医会の先生方から廃止反対の声があがりました。小児科医会の代表の先生と何度も夜遅くまで話し合い、廃止反対の旨の要望書を、学長に出していただきました。患児たちの保護者の方々からも自分たちにできることは何でもするから、頑張ってほしいとの激励の言葉もいただきました。

こうして廃止だけは回避できましたが、小児科病棟は成人病棟との混合病棟となり、6床2部屋という使えない形だけのものとなりました。小児科医も削減され、当直体制も組めなくなり、患者はもう紹介しないと小児科医会の先生からも見放されました。残された医師の仕事は激増しましたが、捲土重来とばかりに耐えてきました。

国の方も不採算性を理由に，全国で小児科廃止が進行することを阻止するため対策が講じられ現在に至っています。

執行部と院長が代わりましてから、筑紫病院は地域支援型の病院にしなければ生き残れないとの認識で動き出しました。まず、この地域で一番立ち遅れていた小児の救急医療から手をつけ、現病院長の努力で救急輪番制が導入されました。徳洲会病院と協力し、小児医療センターとして、24時間、365日小児の救急医療を担っております。小児科の廃止を申し渡されてから数年しか立たないのに、180度の回転です。若い医局員たちは、これまでの経過もよく知らないままに，増員もない少人数で頑張ってくれております。

長年の懸案であった、土地問題も解決し、新病院建設が現実のものとなってきました。こんな中で、どうして辞めるのかとの声も聞こえてきます。確かに赤字は解消し、病院の経営も好転しております。しかし、失ったものも少なくありません。私は筑紫病院は悪くなったと感じており、こんな気持ちで留まるのはよくないと退任を決意しました。私を含め時代を読めなかったものは、ヘッドとなるべきではありません。

新しい病院、新しい部長のもとで、筑紫病院に小児医療センターを開設してほしいと願っております。

会員寄稿

『７５会』
福岡大学医学部入学30周年を記念して

きむらクリニック院長　木　村　　博（７５会幹事）

山陽新幹線が岡山から博多へ乗り入れ、「あなたとわたしは暮らすメイト」とのキャッチフレー　ズで天神コアがオープンした１９７５年に福大医学部に入学。
最上級生（７２年入学）は、４年生（専門２年）で臨床の授業が始まったばかり。
まだSGTは始まってなく、『池越え』出来なかった７２・７３がわんさとおり、　２年生は１８０人　近くいた。

１９７５年（昭和５０年）

エリザベス女王来日。
サイゴン陥落！　３０年におよぶ“ベトナム戦争”集結。
西安近郊で秦・始皇帝の兵馬俑坑発見。
沖縄海洋博覧会開幕。
政界では、前年末に退陣した今太閤・田中角栄の後を受けた三木首相が、パリ郊外のランブイエ城で開催された、第１回サミットに参加。
世界各地で連合赤軍・日本赤軍がテロを繰り返していた。

プロ野球界では、長嶋茂雄が巨人軍の監督に就任、しかし結果は最下位。
広島東洋カープのルーツ監督が審判とのトラブルで退団し、後任に古葉コーチが監督に就任。しかし、これが結果的に良く、この年「赤ヘル軍団」は、球団創立２６年目にして悲願の初優勝を果たす。
高校野球では、東海大相模高校の４番原辰徳（現巨人監督）がアイドル的人気を集めていた。

歌謡界では、新御三家（西城秀樹、野口五郎、郷ひろみ）花の中三トリオ（山口百恵、桜田淳子、森昌子）が常にトップテンを飾り、ピンク・レディーはまだデビュー前。
NHK幼児番組で子門真人が歌う「およげ！たいやきくん」が１００万枚突破。
『アンタ、あの娘の何なのさ』ダウンタウン・ブギウギ・バンドの歌う「港のヨーコ・ヨコハマ・ヨコスカ」が大ヒット。
布施明が歌う「シクラメンのかほり」がレコード大賞を受賞。
フォーク歌手４人（吉田拓郎、井上陽水、小室等、泉谷しげる）がフォーライフレコードを設立。

映画界では、スティーブン・スピルバーグの『JAWS／ジョーズ』が大ヒットした後、『ロッキー』が封切られたばかりでシルベスター・スタローンはまだ無名に近く、ジョージ・ルーカスの『スター・ウォーズ』は撮影中で世の中に出ていなかった。

社会では、
少女マンガから宝塚の舞台に進出した「ベルサイユのばら」に観客殺到。
「欽ちゃんのドンとやってみよう」放映開始。
「３時にあいましょう」で紹介され、癌、水虫、アレルギーから万病に効くとされた「紅茶きのこ」が突発的ブームを生み、半年で消えた。
日本最初のコンビニエンスストアが東京でオープンし、朝七時から夜十一時まで(７－１１)という長時間営業と、「必要な品が何でもそろう」が売りものだった。
ジーンズ姿で友人のような関係の若い夫婦が増え、「ニューファミリー」と呼ばれた。

ヒット商品
「辛子明太子」新幹線の博多乗り入れで博多名物が東京進出
「チルチルミチル」使い捨てライター
「チップスター」日本で初めての成型ポテトチップス
「ピッカリコニカ」世界で初めてストロボ内蔵３５ミリカメラ

（講談社刊　日録２０世紀より）

きっかけは

壱岐で開業していた同級生の大蔵元君の死去でした。
大蔵君は齢４９とまだ５０歳になっておらず、又、土曜日に博多でゴルフをして夕方壱岐に帰り、翌朝冷たくなっているのを発見された次第で、急逝でしたので周囲もビックリし信じられないといった人が多く、誠に残念でした。
その葬儀で元同級生が顔を合わし、いつ何が起こるか分からない歳になってきたので、あの楽しかった青春を伴に過ごしたメンバーともう一度酒でも呑みながら昔談義に花を咲かせようやという事になり、２００５年（平成１７年）１０月ホテルオークラで集いました。

記念写真では

昔のままだったり、体型が変化してすぐには判らないがどこか面影を残している者、何故かヨン様のそっくりさん等様々である。
AGA（男性型脱毛症）は半数以上にみられ、大正製薬の「リアップ」から万有製薬の「プロペシア」に切り替えようかという人。もう完全に手遅れの人も一人、二人おり、写真撮影では逆光になるから端に行って呉れと云われる始末。
新臨床研修医制度の余波で１０年振りに当直をするようになったとの不満。
しかし、話題はもっぱら子供教育・進学、特に医学部入学の話に集中していた。
誰それの娘はどこどこに通った、あいつの息子は医学部を諦めたとか。
同窓会はもっと強くなって入学試験では、師弟には下駄を履かせろとか。
ほんの３０年前には本人の事だったのに、時間の経つのは早いもの。

『７５会』へのお誘い

最後に楽しかった５時間（三次会）を有り難う。
７５年入学の皆さんも昔にタイムスリップして参加してみませんか。
節目の時は、福岡で開催しますが、毎年開催地を変更し、九州漫遊の旅にるつもりです。
診療や役職、家庭の都合で遠出できない方は、申し出て下さい。
今年は小倉、来年は熊本の予定ですが、その先は決まっておりません。
是非、御一報をお待ちしています。

同窓生交歓 No.5

5回生の会、開催しました

松田脳神経外科クリニック 院長　松　田　年　浩（5回生）

寒も緩んだ3月4日、福岡県内で活躍している5回卒業生に緊急招集をかけ、天神平和楼で午後6時から、懐かしの再会をいたしました。55人に案内状を配送し、23人（うち3人は二次会から）の参加、なかなかの出席率でした。まず言いだしっぺの福大第1外科**田中伸之介氏**遅刻。理由は「福新楼に行っとった。」案内状は良く読んでね。続いて、たけの内科クリニック院長**竹野文洋氏**遅刻。「飲み会は7時からに決まっとるやろ。」決まってません。続いて街の人気産婦人科医**古野剛一氏**大遅刻。「福新楼で7時からと思っとった。」見事にダブルで不正解。とまあ、そんなこんなでちょっと心配なお医者さんも含め56歳から48歳までの不可思議な同窓会が始まったわけであります。同窓会で必ず交わされる「お前全然変わっとらんやん」「なーん、お前こそ変わっとらんぜ」というベタな会話も耳に入る中、「こら！そんなわけなかろうが！」と突っこみを入れたい気持ちをぐっと抑える事の出来るようになった成長した自分に、この年月の長さを感じておりました。

基本的に（あくまでも基本的にですよ）第5回卒業生は1976年入学ですので、なんと今年で30年経過。一言で30年と言いますがこりゃあ長い日々ですよ。だってあの頃あんなに勉強嫌いだった若者たちがこんなに勉強嫌いの中年になったんですから（たいして変わっとらんという事か）。北九州からは**香月正嗣、きょう子夫妻**がかけつけてくれて、「俺たち、いつまで続くかわかりません。」と相変わらずのクールな名コンビぶりを披露。

地元小倉で開業している**北城厚志氏**はみんなから「お前、誰かわからんやったぜ。」と言われた回数で当日の金メダリスト。トイレでシッコしながらじっくり考えて、やっと北城とわかったという人も。**三宅純氏**は数々の臨床経験を経て現在は九州厚生年金病院外科医長として活躍中、面倒見の良さで若い医師たちに人気。**占部嘉男氏**は薬院で循環器内科開業、1日100人以上の患者でごった返していると豪語していたがちょっと怪しい。**木村博氏**はまだまだラグビーにどっぷり浸かった生活で現在はラグビー協会のドーピング委員、全国レベルの活躍です。医者がパソコンと向き合う電子カルテの冷たい雰囲気には馴染めないので導入を見送っているという**楠田三樹子さん**（旧姓船越さん）は志免町で開業、ご盛業中です。**鈴木齋氏**は川浪リハビリテーション病院整形外科のトップとして若い医師たちを牽引。**中岡幸一氏**は当日の最年長。「何で急にこんな集まりをするんや。」とかブツクサ言いながらも田川は川崎から参加。あっちの席では「50過ぎたらまたこの集まりやろうな」と盛り上がっているのに、中岡さんからは「おい、俺の還暦祝いにはまたやってくれるんやろ。」と一歩先行くリアルなリクエストが。

不肖私が責任持ってやらせていただきます。**原田迅明氏**（写真右上）は息子同士が同じ学校なので体育祭でよく会いますがそんなことはどうでもよくて、彼は知る人ぞ知るプロの腕を持つアマチュアドラマーとして日本各地で活躍中。医師だけで結成されたジャズバンド、ドクターズの公演も迫っておりますのでよろしく。**松永英裕、泉夫妻**は福大のお膝元で松永医院を経営。福大医学部に通うお嬢さんが今年はもう５年生に。とても楽しみです。下川端で有名な胃腸科クリニックといえば**森幸司氏**の森クリニック。膨大な検診件数で地域の信頼を得ています。さて、今回最も注目すべき話題は一まわり以上年下の女性と最近結婚した福大小児科の**山口覚氏**。日本の法律ではこの年齢差は現行犯逮捕と規程されていますが、５年の交際を実らせたというええ話に免じて、犯則キップに留めておきます。どうぞお幸せに。井尻に脳神経外科クリニックを開業の**吉永真也氏**はサルサダンスの名手。仕事が終わるとサルサへ直行しストレス発散の毎日です。二次会から参加してくれた**松永洋一氏**は徳島文理大学薬学部教授に就任し５回生にも学術派がいる事を証明。**岩崎昭憲氏**は福大第２外科で呼吸器チームの 中枢として奮闘中。最後に登場した**成清哲氏**は５０代で最近西区に開業、開業医の生き甲斐を熱く語ってくれました。今回の幹事を仰せつかりました松田は妻の奈津子と南区で脳神経外科、皮膚科クリニックを開業し、二人三脚で１０年が過ぎました。最低患者数４人からのスタートでした。医療行政の逆風にめげず、まだまだこれからという心境です。

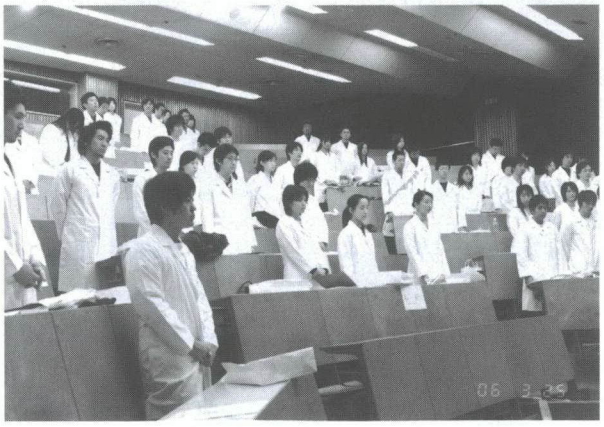
酔っ払いはいましたが、老い込んだ輩はまだ一人もいませんでした。歳を重ねただけで は人は老いない。理想を失う時に老いが始まるのだ。なんてサミュエル・ウルマンの詩じ ゃないけど、まあ、現状に満足せず、病気せず、怪我せず、あせらず、さぼらずがんばりましょう。次回は還暦祝いで！

報　告

3月２２日（水）卒業式を終え卒業生112名
岩崎学部長より学位記授与
医学部大講義室

同じく３月２２日夜　第２９回謝恩会
高木会長より記念品のパニックマニュアル贈呈
ホテルオークラ福岡

第29回卒業生一同



３月２５日（土）
新５年生に対し竹下教授よりBSL用白衣贈呈
臨床大講堂

恒例の国家試験激励会開催---- 来年こそは !!

すでにご存じの方もおられると思いますが、今年の医師国家試験合格率は、新卒 76.6%、全体 73.9%でともに全国最下位の屈辱的成績でありました（別表）。

本人達の努力不足もさることながら、教育者側の責任も大変重要であります。教育カリキュラムの再考や学生個々に対する指導体制の充実など、早急な手立てが必要と思われます。同窓会でもこの過去最低の成績を真摯に受け止め、何らかの支援活動を行いたいと考えております。

4 月 21 日（金）、恒例の同窓会主催による新 6 年生に対する国家試験激励会が、福新楼にて開催されました。今回は先の試験結果を受け、和やかな中にも少し緊迫した激励会となりましたが、同窓会員の叱咤激励にこの子達は来年きっと応えてくれるものと期待しています。そして残念ながら今年不合格となった諸君も、来年は必ず全員合格してくれるものと信じています。

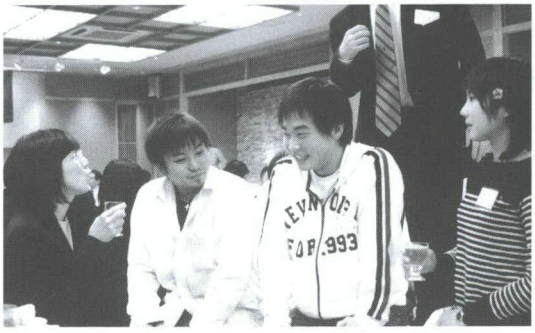
文責：田中伸之介（5 回生、福大第 1 外科、同窓会理事）

ワースト 5 学校名	総　数			新　卒			既　卒		
	受験者数	合格者数	合格率	受験者数	合格者数	合格率	受験者数	合格者数	合格率
福岡大学医学部	134	99	73.9%	111	85	76.6%	23	14	60.9%
藤田保健衛生大学医学部	113	90	79.6%	96	79	82.3%	17	11	64.7%
長崎大学医学部	114	94	82.5%	95	85	89.5%	19	9	47.4%
帝京大学医学部	117	97	82.9%	96	88	91.7%	21	9	42.9%
兵庫医科大学	118	98	83.1%	97	85	87.6%	21	13	61.9%

4 月 21 日（金）　雪辱を誓って M6 に対し国試激励会　　福新楼

①激励する林教授

②それを聞く学生



③くつろいで話もはずむ

④最後に全員で校歌斉唱

部長奮闘記

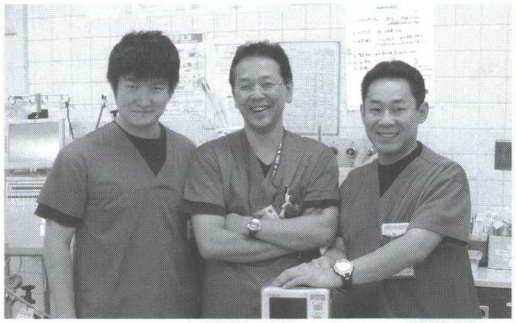
部長奮闘記

福岡赤十字病院 救急部・集中治療部部長　友尻茂樹（15回生）

毎日の絶え間なく続くけたたましい救急車のサイレンの中、締め切りぎりぎりになってこの原稿を書いています。「部長奮闘記」って何を書けばいいの？取り敢えず思いつくまま書いていきます。まずは自己紹介。産地は熊本市内で、やかましい外科医の長男坊として産声を上げ、案の定中学ぐらいからぐれはじめ、福大の医学部には人より6年も遅れて24歳で入学し、めでたく30歳で福岡大学医学部卒業、福岡大学救命救急医学講座に入局となりました。研修医時代は救急医学そのものが、日本ではまだ発展途上段階で、わけのわからないまま研修医時代を無事終了（？）その後、医員、大学院、助手として3次救急医療人生を一気に駆け抜けました。H13年からは北九州八幡西区にある病院前救護を担っている救急救命士を育てる学校（救急振興財団：救急救命九州研修所）で教授職を経て、日本各地の救急隊の方に病院前救護の様々な苦悩およびお酒の飲み方を教えて頂き、H14年4月からは田中経一教授（現救命救急センター教授）から「あーたさ、日赤にちょっと行っちゃらんね！」といわれ何もわからないまま、期待と不安を胸に福岡赤十字病院救急部出向となりました。救急部は何と新設（そんな話初耳！！しかも一人ぼっちの副部長！部長はだれかわからない？？）で、さーどうしたものかと思う暇も無く、救急車対応が始まりました。さすがに1人の対応だけに日勤勤務しかできませんでしたが、就寝時もポケベルは毎日耳元、24時間オンコール状態で、各科とのコミュニケーションも取らなければならないため、顔で笑って心で泣いて「喜んで！」の一言で駆けつけていました。当時を思い出して一番苦労したことは、救急という新しい部門（集中治療部門も含めて）が病院の各部門にすぐには理解して貰えなかったことです。専用病棟を持つことなく救急外来とICUの中での作業になるので、各部門から何をしているか理解してもらうまでにはかなりの時間を要しました。しかし、そんな孤独な中でも、福大出身の脳外科（特に岩朝先生）、麻酔科、肝臓内科（特に飯田先生）の先生方には手伝って頂き、ハゲ（？）まされ、何と心強かったか！この紙面を借りて御礼を述べたいと思います。

H14年10月からは福大救命救急医学講座研修医2年目の平井先生、H15年4月からは福大1内科の白濱先生が応援に駆けつけてくれて3人体制となり準夜勤務（夜中0時まで）と臨床工学技士6人が救急部所属となり、集中治療領域までの業務を拡大することができました。H15年4月からは福大救命救急センターの臨床実習（福岡大学医学部5学生）の一部を救急部にて施行することになり、現在も年間100名以上の学生を受け入れています。

また、H15年5月からはメディカルコントロール・MC体制下（メディカルコントロールとは①救急隊が、現場から24時間いつでも迅速に救急専門部門の医師等に指示、指導及び助言を要請できること。②実施した救急活動の



第１期救急部（左から平井、友尻、白濱）

福大医学部５年生ＢＳＬ実習

医学的判断及び処置の適正性について、医師による事後検証を行いその結果を再教育に活用すること。③救急救命士の資格取得後の再教育として、医療機関において定期的に病院実習を行うこと）で、福岡市消防からの要請により救急救命士就業前実習（国家試験に合格した救急救命士が救急現場で就業する前に行う病院実習）およびH17 年４月からは救急隊の再教育実習である福岡市消防ワークステーション方式 Dr カー（福岡市消防の救急車が病院に常駐して、重症症例の際には救急隊が Dr とともに現場に出動する）を市民病院、福岡大学病院、済生会病院とともに行っています。また、平成 16 年度からは救急救命士の気管挿管実習病院として受入を開始しました。

H16 年４月からはスーパーローテートの研修医の１年目・２年目の先生（福大・九大協力型、当院管理型）を受け入れ、スーパーローテートの最重要課題であるプライマリーケアー

福岡市消防ワークステーション方式 Dr カー

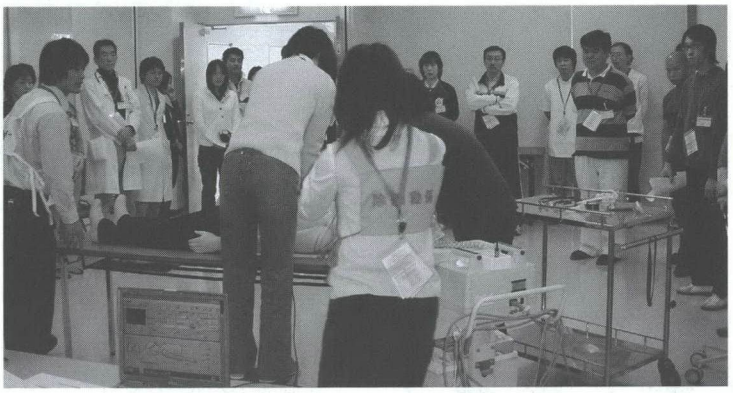
の教育を中心に行っています。救急車で来る疾患は多種多様で３ヶ月間の研修で約400症例位の救急患者の対応を行うことになり、その評価を EPOC 上で行っています。福大からのスーパーローテートの希望者は多く、全ての先生方の実習希望をかなえてあげたいのですが、救急部のスペースや指導医のマンパワーの問題もあり、断腸の思いで何人かの研修医の先生をお断りしているのが現状です。

スーパーローテート実習風景１

スーパーローテート実習風景２

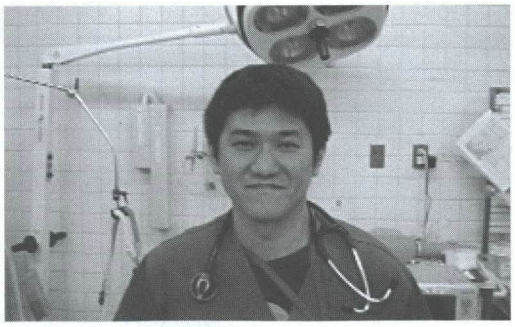
H16年7月からは日本救急医学会認定ACLS基礎（ICLS）コースを年に救急部主催で年に4回程度行っています。

当院は災害拠点病院に指定されています。福岡西方沖地震の際には福岡市の救急車にて、天神の現場まで出向き、また救急部のDrを第



日本救急医学会認定
福岡赤十字病院 ICLS（二次救命処置）コース

平成17年4月からは部長に就任し、福大救命救急医学講座から田中仁先生、西田武司先生を迎えて、各科協力体制の下、更に充実した救急医療を行えるようになり、主に軽症・中等症救急疾患のTriage、重症救急疾患の初期治療を行う救急部、集中治療部、総合診療部の3本立てでスーパーローテートの先生方とチームを組み、3人体制で従事しております。内因、外因性の両疾患とも増え、年間の救急車台数も約5000台と増加傾向を示しています。1次・2次の救急疾患がほとんどですが、ICUにて人工呼吸器管理、循環管理を余儀なくされる重症救急疾患も増加してきています。



田中　仁先生（２１回生）

西田　武司先生（２３回生）

一陣の救護班として自衛隊のヘリで玄界島まで派遣を行い、被災者を当院でも受け入れました。災害拠点病院は大規模災害（自然災害や生物・化学兵器災害など）の際に重要な役割を果たす義務がありますが、その点に関しても各救急医療施設と協力し、今後更なる充実を図りたいと思っています。

最後に「救急医の役割とは何ぞや？」ということを書かせて頂けたら幸です。今一番実感していることは「人の命の儚さ」です。今まで健康で元気だった人が、「行ってきます」と言って玄関を出た人が、一瞬の間に変わり果てた姿となり、生死の境を彷徨う、そのような場

面に度々遭遇してきました。そのような状態の患者さんに接していくところが他の科とは少し違うところかなと考えています。人間にはホメオスタシスがあり、病に自ずと戦おうとする力があります。しかし、不意の事態にその力が出せないことも事実です。船に例えると救急医は船頭の役割だと考えています。生死を彷徨う船は、嵐の中で方向を見失うこともあるでしょう、船体に水が入り沈み込むこともあるでしょう。その嵐が止むまでの間、ホメオスタシスが回復するまでの期間を乗り切ることが、私たち救急医、船頭の役割だと考えています。「何かもっともっとこの患者さんにできることはないだろうか？」「自分がこの患者さんだったら、どんな医者に診てもらいたいだろうか？」「自分の身内がこの患者さんだったら？」いつもそう考えながら生きてきた気がします。

今後も「いつでもどこでも喜んで！」の精神で救急部を盛り立てていきますので、福岡大学医学部同窓会の皆様、どうぞ宜しくお願いいたします。

以上、長くなりましたが、福岡大学医学部同窓会の更なる発展をお祈り申し上げて筆を置かせて頂きます。

春日駐屯地の自衛隊ヘリにて玄界島へ

救護班搬送による被災者病院到着

九電記念体育館避難所による診療開始

救護班による心のケアー（4/1〜4/26）

教室紹介

泌尿器科学教室　医局紹介

医局長　講師　田　丸　俊　三（9回生）

田中正利主任教授を中心として、臨床では、常に患者さん側の立場に立って、人に優しい医療を行うように心がけています。また大学病院の使命である研究･教育においても意欲的に取り組み日夜、努力を重ねています。

泌尿器科のイメージとして一般的に夜尿症、膀胱炎･腎盂腎炎などの尿路感染症、性病、尿路結石、排尿障害の代表である前立腺肥大症というマイナーな印象が強いと思いますが，これらばかりではなく、実際には腎・副腎・尿管・膀胱・精巣・前立腺等幅広い領域をカバーし、開放手術（各臓器の全摘術）から腹腔鏡下手術や顕微鏡手術など多種多様な手術術式を導入しています。当科の特徴としては、泌尿生殖器系の癌や先天奇形（水腎症、膀胱尿管逆流、尿道下裂、停留精巣など）に対する治療には長年の実績があります。また尿路結石に対して内視鏡下あるいは体外衝撃波砕石装置も十数年前に導入しており、低侵襲性治療の代表である腹腔鏡下手術の実践と教育のも積極的に取り組んでいます。現在３人の泌尿器腹腔鏡下手術認定医が在籍し腎･副腎、結石、腎盂形成術から前立腺全摘術まで幅広く行っています。このほか，高血圧を来す副腎疾患や結石･骨粗鬆症を来す上皮小体機能亢進症などの内分泌外科や腎移植も積極的に取り組み、最近では著しく増加した前立腺癌に対する早期診断と適切な治療にも力をいれています。

今後も同窓会の皆様の期待に少しでもお応えできるよう医局員一同、努力していく所存であります。さらなるご支援･ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

《新生小児泌尿器グループ　松 岡 弘 文》

小児泌尿器グループは、当教室開設以来の柱の一つで連綿とした診療･研究が続けられています。その中心を担ってきた大島一寛教授がこのたび退職され、4月から新診療体制となりました。福岡大学卒業のスタッフで今後も精力的に診療を続けていく方針ですので、同窓生の皆様の今までと変わらぬご支援をお願い申し上げます。

《腎移植グループ　中 村 信 之》

ますます元気な福大病院の『腎移植』にご協力を！

腎臓内科や小児科等のご協力で1984年以来、30例以上の実績のある当科の腎移植は、鏡視下でのドナー腎摘で行う生体移植に加え、献腎移植、小児の腎移植などでも良好な成績を収めております。ますます元気な福大病院の腎移植へのご支援を宜しくお願いします。

眼科学教室紹介

眼科学教室　医局長　尾　崎　弘　明

眼科学教室は増田義哉初代教授の許、昭和４８年に開講しました。二代目の大島健司教授（現名誉教授）は硝子体手術における日本のパイオニアであり教室を飛躍的に発展させました。昨年度からは、内尾英一教授が新たに主任教授として赴任されています。内尾教授はアレルギー疾患、免疫疾患、角結膜疾患の専門で教室に新しい風をとりいれています。

現在の教室のスタッフは林英之教授、近藤寛之講師、尾崎弘明講師、木村亮二助手、右田博敬助手、小沢昌彦助手、梅田尚靖助手に加え、数名の医員と卒後研修の医師から構成されています。関連病院は充実しており、聖マリア病院、村上華林堂病院、唐津赤十字病院、済生会八幡総合病院、佐世保共済病院、福岡徳洲会病院、和白病院、福岡赤十字病院、白十字病院、田主丸中央病院、タカオ眼科に常勤医師が出向しています。大学院生は現在１名で、他に１名が米国留学しています。昨年９月から外来のシステムが変わり、月曜日から金曜日まで毎日の外来診療となりました。午後には眼炎症、小児眼科、網膜硝子体、緑内障、未熟児網膜症などの専門外来を設けています。一方、手術日は週２日で、３台のベッドを使用して年間約９００例近くの症例をこなしています。本年度からは４名の新入局者も加わり、内尾教授を中心にこれからも明るく活気のある教室づくりを目指していきたいと思っています。今後とも御指導、御鞭撻の程よろしくお願いいたします。

支部だより

筑紫病院支部だより

福岡大学筑紫病院泌尿器科　講師　石　井　　龍（5回生）

筑紫病院支部は現在81名で、病院全体の医師数が約130名ですから福大出身者は6割を超え、1回生から26回生まで分布し、その中央値が18回生と若い先生が多いのが特徴です。このことは筑紫病院の成り立ちから当然でしょうが、助教授以上の同窓生をみると、教授が3回生の浦田先生（内科1）、助教授が1回生の二見先生（外科）、2回生の櫻木先生（麻酔科）、6回生の津田先生（消化器科）、7回生の山之内先生（内科1）と5人おり、浦田教授は現在副病院長も兼務されています。日常の仕事で福大出身とか何大学出身とかを意識することはなく、筑紫病院支部の同窓生だけで親睦の会を開くこともありませんが、母校出身者が筑紫病院の中枢に食い込んでいきつつあることは良いことです。

平成 17 年度まかせん会例会（同窓会福岡支部）

福岡支部副支部長　田　野　茂　樹（6回生）

本年度３回目のまかせん会が平成18年３月９日西鉄グランドホテルにて開催された。

特別講演講師としてこの度小児科主任教授に内定された３回卒の廣瀬伸一先生をお招きした。

本校３人目となる主任教授誕生とあって、３０名を越える会員の先生方にお集まりいただいた。

講演内容は非常にすばらしく、会員一同あっという間の一時間だった。廣瀬先生の２０年間にわたる研究の成果を我々にも分かりやすいように、簡単な言いまわしと解説によりご説明いただいた。同様に並々ならぬ医学部に対する愛情と情熱をも感じられた。これなら我々の仲間である学生諸君にもおおいに力をかしていただけると、会員一同確信した。その後、多くの会員の先生方に質疑応答をいただいたことでも期待の大きさが分かった。

会場を移り宴会となっても興奮覚めやらず、おおいに盛り上がった。万歳にて散会となった後も個々輪になり語り合った。

当日お忙しいところご講演いただいた廣瀬先生に感謝するとともに、御参加いただいた会員の先生方に御礼申し上げます。今年度中に福岡支部と福大病院との病診連携をよりいっそう高めるために、委員会を立ち上げる計画です。御協力をお願いいたします。

特集　クラブ生まれて30年

軟式野球部生まれて30年

椎クリニック院長　椎　　教　次（6回生）

小さい頃から野球は大好きでした。小学校の頃は学校から帰ったらすぐに近くの空き地に行き、コンクリートの壁を相手に暗くなるまでボールを投げていました。壁にストライクゾーンの的を書き、相手バッターには当時無敵を誇っていた巨人軍の選手を想定して夢中になって投げました。忘れられない思い出です・・・大学三年生時に軟式野球部の存在を知り、グローブを探し出し早速入部しました。私が入部したのは、創部3年目で当時白水茂輝さんが一代目のキャプテンでした。白水さんが引退後私が引き継ぐことになりました。

今年創部30年と聞き懐かしさとともに驚きを感じています。あの頃、入部当時の頃を少しずつ思い出してみたいと思います。まずは、白水茂輝さんのお便りからスタートです。

軟式野球創設時の思い出（白水茂輝）

福岡大学入学後まだ本学キャンパスでの進学課程の時、子供の頃より好きだった野球が気楽に出来ないものかと思い、友人であった井上隆人君、北村亨君、井上忠雄さん等と軟式野球部の創設を思い立ちました。部の規約作りなど色々と大変で、何度も訂正されそのたびに本学学生課に日参したものでした。また顧問には泌尿器科の坂本公孝教授にお願いすることとなり、医学部キャンパスまでお尋ねし顧問就任を依頼、快くお引き受けいただき軟式野球部創設の運びとなりました。しかしながら当初はメンバーが足りず、また専用のグランドも無い有様で、早朝に対外試合を行うのが主な活動状態でした。その為、毎回午前4時、5時に起き医学部横のグランドを確保したものでした。しかもメンバーが足りず、9人、10人ぎりぎりの人数で試合を行ったものでした。対戦相手は自分たちで探してこなければならず、当時はやりの早朝野球のチームを見つけては試合を申し込むといった感じでした。設立当初はなかなか勝てず連戦連敗といった状態でしたが、翌年から村田英昭君、春田淳君が入部、その翌年には椎教次君、内田泰彦君、鬼丸円君、次に立木均君など上手い人たちが次々と入部し試合にも勝てるようになりました。最も成績が良かった年で年間21勝あげたと思います。当時はまだ九山医体、西医体などに軟式野球部は加盟していませんでした。今にして思えば一度はそのような大きな大会で戦ってみたかったと思っています。現在は出場しているといった噂を耳にして、我々が立ち上げた軟式野球部が脈々と後輩に受け継がれていると思うとひとしお感慨深いものがあります。

顧問　坂本公孝教授

顧問を引き受けていただいていた坂本公孝教授、ならびに泌尿器科医局の先生方には大変お世話になりました。ボール等野球道具の援助をはじめ何かと気を配っていただきました。その後も泌尿器科の先生方に顧問を引き継いでいただき、お蔭様で徐々に部活としての形を整えていくことができました。

ユニフォーム

当時バラバラだったユニフォームを揃えることがまず第1の課題でした。ユニフォーム姿もいればジャージ姿もいました。極端なと

きはランニングにバミューダ姿も混じっていました。まずはカタログを集めてあれこれ悩んだ末、当時のドジャースモデルに決まりました。好きな背番号を選び、揃いのユニフォーム姿で格好だけは様になってきました。さあ、あとは練習です。

グラウンド（練習場）

練習場の確保はとても困難でほとんど早朝の練習でしたが、それでもなかなか思うように場所を確保できませんでした。仕方なく近くの他大学のグラウンドを利用することもありました。グラウンドの空いている日を有料で使用させてもらいました。印象を好くするために練習後のグラウンド整備には特に気を遣ったものです。

対戦相手

対戦相手は、社会人の早朝野球チームが多かったのですが、少しずつ他大学の軟式野球チームと対戦する機会も増えてきました。そしてその頃には部員の数も増え紅白試合ができるまでになってきました。また九山大会への参加の声も上がってきたのですが、残念ながらその当時には遂に実現し得ませんでした。

そして現在

先日軟式野球部から定期的な活動報告が届き、対外試合を初め活発な活動が行われていることを知り大変喜ばしくそして頼もしく感じています。30年という月日は本当に早く感じますが、あの頃の、野球を通じての懐かしい思いではたくさん残っています。これからも決して忘れられない思い出です。野球というすばらしいスポーツに、そして野球を通じて知り合えたたくさんの仲間達に感謝したい気持ちです・・・軟式野球部創部30年、万歳！

←昭和53年頃の写真です

最近の写真です→

キャンパス便り

医学祭を振り返って

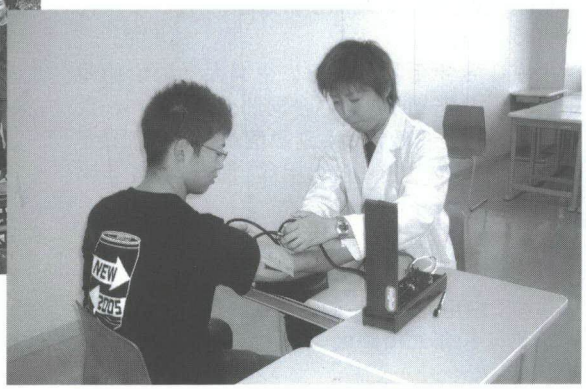
第25回医学祭実行委員長　中島勇太（M5）

昨年の１１/３(木)～１１/５(土)に「可能性を求めて　～人生を変える医療～」というテーマのもと、第２５回福岡大学医学祭を行いました。皆で力を合わせ頑張ってきた結果、大盛況で無事終わりました。医学祭自体は３日間と短い期間ですが、これを作り上げるのには１年もの時間を費やしました。実に充実した一年だったと思います。

医学祭では、吉本の芸人によるお笑いライブ、３人の先生方による地震についての講演、大ビンゴ大会、臓器展示（アルコールとたばこについて）など、様々な企画を行いました。またパンフレットにおいても、皆で趣向を凝らし、近年話題となった災害医療（福岡西方沖地震について）、美容外科の現実、女性医師の将来を特集とし、より楽しんでいただけるように「チャリ男」という実行委員主演のドラマ企画も作り、様々な年齢層の人に興味を示していただけるように工夫しました。パンフレットはもちろんのこと、ポスターを街に貼りに行ったり、看板を作ったり、テレビ・雑誌に出るなどして宣伝を頑張ったおかげで、多くの人が医学祭に足を運んでくれました。

この医学祭を通して、今しかできない大変貴重な経験ができたと思います。１つの事を皆一丸となって成し遂げるということは、実に難しいことで、楽しいこともあった反面きつかったことも大いにありました。仕事が終わらなくて、夜中までかかったこともありました。しかし、皆で協力して、支えあいながらその困難を乗り越えたとき、言葉では言い尽くせないほどの喜びを感じました。今となってはすべてがいい思い出です。

最後になりましたが、医学祭を開催するにあたって、御指導、御支援、御協力を賜わりました諸先生方や福岡大学医学部同窓会の皆様方、取材に協力してくださった先生方、関係者の皆様方、そして医学祭スタッフのみんな本当にありがとうございました。ほんとにいい経験なので、後輩たちも積極的に参加して、様々な企画を考え、今以上に盛り上げていってください。楽しみにしています☆



訃　報

追悼　故白川光一先生

日田中央病院副院長　鬼　木　寛　二（1回生）

昨年の暮れ１２月１８日に、７８年間の人生の幕を引かれた故白川光一先生に謹んで哀悼の言葉を捧げます。

最近体調をくずされ、生死の境を彷徨っておられるという噂は聞いていたが、昨年の１０月２９日の福岡大学医学部産婦人科学教室の同窓会には比較的元気なお姿をお見せになっていたので大変驚いた。この同窓会で小生が第３代同窓会会長に選任され、この時に乾杯の音頭をとって頂いた。この翌々日開業医の先生の葬儀に参列され、そこの席にて倒れられたとのことである。その際頭部を強打、外傷性のクモ膜下出血にて急変され、福岡済生会病院から福岡大学病院高度救命救急センターに転院され、人工吸器管理状態になっておられた。主治医の松尾邦浩先生（８回生）をはじめスタッフの努力で意識がある程度戻られたところまで回復されたが残念な結果となった。一時代が終わった様な気がする。

平成１８年１月２２日に福岡大学医学部産婦人科学教室と同窓会の合同葬が執り行われたが、瓦林達比古教授から副葬儀委員長の大役を仰せつかったのでその時、弔辞と閉会の辞を述べさせて頂いた。

弔　　辞

謹んで白川光一先生の御霊前に申し上げます。

昭和４８年に福岡大学医学部産婦人科学教室が、初代主任教授となられた白川先生により開講されました。金岡助教授、熊本、指方両講師や麻生先生が着任され、翌年には有吉、丸木、松岡先生等が入局されましたが、少ないスタッフで苦労しながら教室を徐々に大きくされて行かれました。その後昇、田中、青沼、清水、葉山の各先生が入局されました。診察の傍ら私ども学生を教育されさぞ御苦労なさったことでありましょう。

昭和５３年に１回生である田口、山本そして私鬼木が入局し、産科婦人科の分娩や手術を御指導頂きました。当時は先生の専門分野であるRh(－)の学問も教えて頂き、分娩直後に交換輸血をさせて頂いたことがつい昨日のように懐かしく思い出されます。その後も２回生、３回生、４回生の卒業生や他大学卒業の各先生が入局され、徐々に大所帯となっていきました。

御蔭様で私共弟子達は立派に地域医療に貢献出来る程までに成長させて頂きました。

24年間の長きに亘って主任教授を努められ、福岡大学医学部及び産婦人科学教室の発展の礎となられたことは永久に歴史に刻まれることでありましょう。

平成９年からは二代目主任教授となられた瓦林先生にバトンタッチされ、更なる発展に寄与されておられます。これも一重に白川先生の基礎が有ったればこそと思います。

在任中東京の学会で急性心筋梗塞にて倒れられ、その後も色んなストレスにて再発の不安もお有りになったことでありましょう。

先生が危篤状態になっておられた時、人工呼吸器に繋がれた先生のお姿を目の当たりにして、色んなことが走馬灯のように浮かんで来ました。しかし、先生のお顔が何故か安らかに見えました。

先生は人生を締めくくられましたが、瓦林教授をはじめ教室の皆や我々同窓会員の初代名誉会長として、そしてまた御家族の皆様を空の彼方より見守って頂きたいと思います。

先生どうぞ安らかにお眠りください。

有難うございました。　　合掌

御鍵孝史　追悼

甘木中央病院 部長　石　田　秀　樹（2回生）

2回生(S48年入学)の御鍵孝史は、H17年11月23日、九州中央病院において死去した。享年56であった。

私は、医進1年目の春、大学の教室で知り合って、以後その日まで親交を続けた。

今回、同窓会の方より追悼文を書くようにとの事で、葬儀の際、読んだ弔文をそのままそれに当てる事とした。

(彼は、卒業後、福大第1外科に入局し、H2年より薬院にて「御鍵医院」を開業していた。死因は食道癌であった。)

哀　悼

御鍵!　御鍵孝史!　　あえて「御鍵先生」でなく、「御鍵さん」でもなく、ましてや「御鍵君」でなく、「御鍵」こう呼びかける事を許せ。

「先生」等と呼ばずとも、君が立派な医者であった事は誰もが知っている。

11月20日。君が永眠する三日前の日曜日。朝から、何か虫が知らせて、九州中央病院へ、国富(2回生)と井槌(2回生)と3人で会いに行った。

「御鍵」との呼びかけに、君は、しっかりと大きく眼を開いて、嬉しそうに笑ってくれた。ありがとう。僕らは、あのほほえみで救われた。生きている君のほほえみは、これが最後だった。

御鍵!　君の人生を際立たせているのは、まず第一に、その男らしさ、男らしいやさしさだ。鹿児島の南端、遠く東シナ海を見晴るかす「薩摩富士」開聞岳のふもとの由緒ある名家に生まれ、最後まで、その誇り高い生き方を貫いた。実に颯爽(さむらい)とした、その生。誠に君は「武士(さむらい)」だった。武士の魂を秘めた、医学者だった。そして第二に、生まれ持った品格。素晴らしい知性と感性。シャープで明晰な頭脳は言うまでもなく、その道を行けば一流の芸術家にもなり得たであろう、繊細で洗練された感覚、感性。君はこよなく音楽を愛した。美しいものを愛した。発想の自由さ。ユーモアのセンス。豪放だが、はにかみに満ちたあの独特の笑い。無論、これらのうらやましいほどの才能は、医学の実践の中で、十二分に君にあって発揮された。その上、君は非常な勉強家だった。楽しそうに医学の勉強に取り組んでいた学部時代の君の姿が浮かんでくる。毎晩、夜遅くまで大学に残って勉強していた。そして、時に驚くような発想で、基礎医学についての深い理解を我々に示すのだった。

現代の日本において、人生の五十六年、五十六歳は確かに短い。がしかし、君の自由で優しさに満ちた、医学と美を愛する魂はその生を十分に燃焼した。燃焼し尽くした。敢闘した。

神はいつの世でも、君のような純真な魂を愛する。君は、老成の風格を早くからみせていたが、青年として逝き、永遠に若い。見事だ。内に繊細な魂を秘めた、あの颯爽とした生き方。見事だ。しかも、御家族、御家庭にも恵まれた。悲しみや、嘆き。悔恨や喪失感等は、当然ながら残された者たちのものだ。君自身は、今、天上で静かにほほえむ。そして、その美しい魂は、御家族を始め、君に接した僕たちの心の中に、永遠に生き続ける。その輝きは、いつまでも僕たちを照らし続け、守り続ける。最後に、哲学者(詩人)ゲーテの言葉を借りる。「真に偉大な者とは、英雄や、いわゆる「偉人」ではなく、社会の一隅を、片隅を照らし得る者である。」君がまさにその人だった。

君の魂よ。安らかに!永遠に!「別れ」は一時。いずれ、天上の星で会おう。

医局長・医長名簿

（○内の数字は卒業回、筑紫病院の＊印は内科・消化器科の代表）

平成18年4月現在

所属	医局長	病棟医長	外来医長
[福大病院]			
血液・糖尿病科	高松 泰	石川 崇彦	安西 慶三
循環器科	三浦 伸一郎 ⑪	岩田 敦 ⑳	安田 智生 ⑰
消化器科	入江 真 ⑬	西村 宏達 ⑰	江口 浩一
腎臓内科	小河原 悟 ⑦	武田 誠司 ⑪	兼岡 秀俊
呼吸器科	白石 素公 ⑪	久良木 隆繁	山本 文夫
神経内科・健康管理科	齊藤 信博 ⑲	井上 展聡 ㉑	小林 智則 (神経)
〃			上原 吉就 ⑯ (健管)
精神神経科	浦島 創	正化 孝	藤内 栄太 ⑳
〃（テ゛ィケア）			松嶋 圭
小児科	柳井 文男	井上 貴仁 ⑮	安元 佐和 ⑦
外科第一	松尾 勝一 ⑪	牧 孝将 ⑭	緒方 賢司 ⑮
外科第二	白石 武史	前川 隆文 ②	星野 誠一郎
整形外科	城島 宏 ⑭	金澤 和貴	有水 淳 ⑪
形成外科	宮本 洋	白武 靖久 ⑳	木下 浩二
脳神経外科	大城 真也 ⑪	安部 洋 ⑳	岩朝 光利 ⑰
心臓血管外科	岩橋 英彦 ⑰	林田 好生 ⑳	竹内 一馬 ⑳
皮膚科	山口 隆広	高橋 聡 ⑱	荒尾 有美子 ㉓
泌尿器科	田丸 俊三 ⑨	中島 雄一 ⑫	中村 信之 ⑩
産婦人科	吉里 俊幸	小濱 大嗣 ⑮ (3東)	井上 善仁
〃		辻岡 寛 ⑮ (3北)	
眼科	尾崎 弘明	右田 博敬 ⑯	近藤 寛之
耳鼻咽喉科	今村 明秀 ⑪	末田 尚之 ⑰	小倉 朋子 ⑮
放射線科	清水 健太郎 ⑰	高良 真一 ⑱	木村 史郎 ⑬
麻酔科	香取 清 ⑬	廣田 一紀	平田 和彦 ⑫
歯科口腔外科	梅本 丈二	池山 尚岐	梅本 丈二
病理部	久野 敏		
臨床検査部	明比 祐子		
輸血部	熊川 みどり		
救命救急センター	益崎 隆雄 ⑪	喜多村 泰輔 ⑯	
総合周産期母子医療センター		雪竹 浩 ③	
[筑紫病院]			
筑紫病院（総医局長）	伊崎 輝昌		
内科第一	山之内 良雄 ⑦＊	土屋 芳弘 ⑬	新村 英也 ⑱
内科第二	飯野 研三	豊島 秀夫 ⑧＊	飯野 研三
消化器科・内視鏡部	植木 敏晴 ⑧	津田 純郎 ⑥	高木 靖寛 ⑮＊
小児科	喜多山 昇 ⑧	深町 滋 ⑱	喜多山 昇 ⑧
外科	関 克典 ⑱	永川 祐二 ⑲	成富 一哉 ⑱
整形外科	伊崎 輝昌	古賀 崇正 ⑬	伊崎 輝昌
脳神経外科	鬼塚 正成	相川 博	風川 清
泌尿器科	石井 龍 ⑤	平 浩志 ⑮	石井 龍 ⑤
眼科	武末 佳子 ⑪	佐川 卓司	武末 佳子 ⑪
耳鼻咽喉科	宮城 司道 ⑨	宮城 司道 ⑨	菅原 真由美
放射線科	中島 力哉 ⑭		
麻酔科	堀 浩一郎 ⑬		
病理部	原岡 誠司		
救急部	三原 宏之 ⑨		

教育職員人事（講師以上）

（○内の数字は福大医学部卒業回）

［平成 17.10.2 ～ 18.4.1］

区分	所属	資格	氏名	発令日	
退職	総合医学研究センター	教授	宮内亮輔	18. 3. 31	定年
	筑紫外科	教授	有馬純孝	18. 3. 31	定年
	細胞生物学	教授	池原征夫	18. 3. 31	定年
	小児科学	教授	満留昭久	18. 3. 31	定年
	泌尿器科学	教授	大島一寛	18. 3. 31	定年
	筑紫小児科	教授	津留徳	18. 3. 31	定年
	生化学	助教授	立石カヨ子	18. 3. 31	定年
	衛生学	助教授	宮崎元伸	18. 3. 31	
	放射線科	講師	北川晋二	18. 3. 31	
退任	微生物・免疫学	教授	永山在明	18. 3. 31	総合医学研究センター
	外科学第一	教授	池田靖洋	18. 3. 31	総合医学研究センター
	耳鼻咽喉科学	教授	加藤寿彦	18. 3. 31	総合医学研究センター
昇格	小児科学	教授	廣瀬伸一③	18. 4. 1	
	筑紫眼科	教授	向野利寛	18. 4. 1	
	筑紫病理部	教授	岩下明徳	18. 4. 1	
	生化学	助教授	黒木求	18. 4. 1	
	総合診療科	助教授	鍋島茂樹⑬	18. 4. 1	
	臨床研究支援センター	助教授	野田慶太⑥	18. 4. 1	
	筑紫消化器科	助教授	津田純郎⑥	18. 4. 1	
	生化学	講師	衣笠哲史⑩	18. 4. 1	
	病理学	講師	久野敏	18. 4. 1	
	耳鼻咽喉科	講師	坂田俊文⑩	18. 4. 1	
	血液・糖尿病科	講師	高松泰	18. 4. 1	
	外科第二	講師	山本聡	18. 4. 1	
	筑紫消化器科	講師	宗祐人⑫	18. 4. 1	
採用	細胞生物学	教授	白澤専二	18. 4. 1	
	微生物・免疫学	教授	廣松賢治	18. 4. 1	
	耳鼻咽喉科	教授	中川尚志	18. 4. 1	
	筑紫内科第二	講師	飯野研三	18. 4. 1	
休職	微生物・免疫学	講師	安中加公子	18. 3. 16	
	脳神経外科	講師	継仁⑧	18. 4. 1	

編集後記

七隈周辺はこの春、外環状線と都市高速道の部分開通で大変様変わりしました。また病院南側には新しく看護学科の講義棟が建設中で、その鉄筋鉄骨が勇ましくそびえ立っています。さらに新診療棟も平成21年秋の完成予定で、近々着工の予定と聞いています。ハードの変革はその足音を大きくしています。ソフトの改革は？　医学（医学部）と医療（病院）、いま福岡大学はハードとソフトの両面で大きな変革期を迎えようとしています。だからこそ今、同窓会の力が必要です!!

編集委員長　田中伸之介（5回生）

烏帽子会会報第40号

発行日　平成18年5月15日
発行人　高木忠博
編集人　田中伸之介

発行所　〒814-0180
福岡市城南区七隈7-45-1
福岡大学医学部同窓会
電話 092-865-6353（直通）
092-801-1011（代表）
内線 3032
FAX 092-865-9484
E-mail:eboshi@minf.med.fukuoka-u.ac.jp

印刷所　ロータリー印刷㈱
福岡市中央区長浜2-1-30
電話 092-711-7741
FAX 092-711-7901

今だから夢

第25回福岡大学医学部同窓会総会

幹事学年第9回生、第19回生

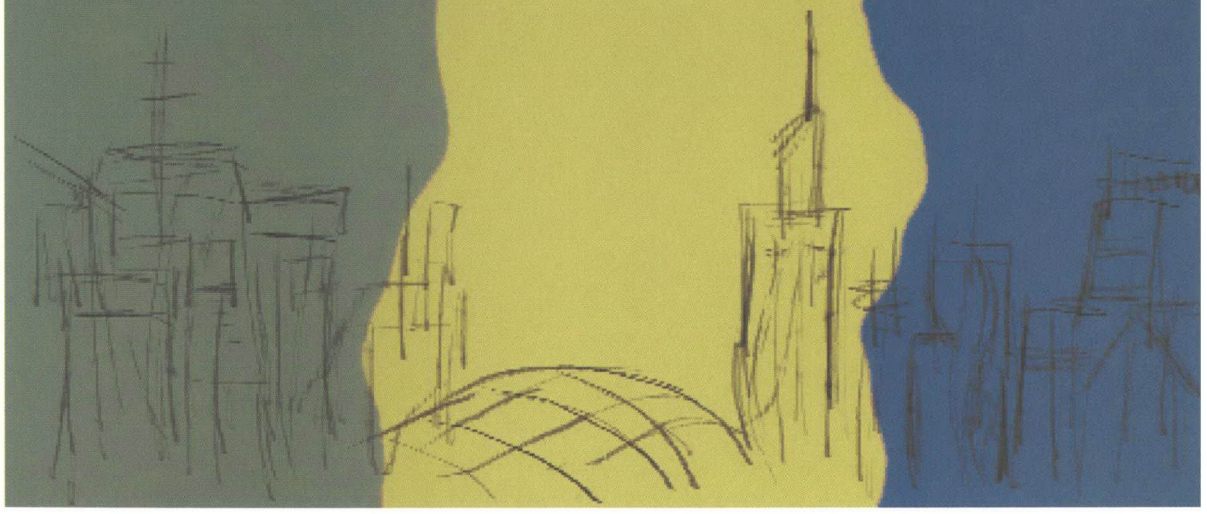
日時：平成18年7月8日（土）

時間：総会　17：00～

講演会　18：00～

懇親会　19：00～

会場：ホテル日航福岡

講演：吉永　陽一郎　福岡大学医学部第9回生

そばにいる人は誰？（ランナーの伴走者としての医療者）